
IS <インフィニット・ストラatos> 馬鹿の集いしIS学園

カルボナーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS <インフィニット・ストラトス> 馬鹿の集いしエス学園

【EZコード】

Z7940S

【作者名】

カルボナーラ

【あらすじ】

ISにバカテスを組み込んで設定をいじった作品です。文才の無い作者の処女作なので感想とかくれると嬉しいです。更新は遅めです。

プロローグ

第一話 女だらけの学園、例外の五人の男達

「「「「「や～ん」」」

「「「「はあ～」」」

藍越学園と思つてゐる（HIS学園）の試験会場で迷つてゐる男子が五人いた。

「なあ

「ここので赤い髪の男が呆れたような顔で、唸つてゐる一人に尋ねた。

「ん?」「なに?」

声をかけられた二人は唸るのをやめて声の主に聞き返した。

「「「「なにじやねえだろ（じゅう）……」」」

三人は声を合わせてそう言つた。

「もう、後試験開始時間まで20分しかねえじゃらうが……！」

いきなり美少女と間違つような少年が声を上げた。

「・・・しかもまだ試験会場の教室すら見つかってない

無口そうな少年が続いて言った。

「だ、大丈夫だよ、後、5分までに入ればセーフだよ」

道案内をしていた馬鹿そうな少年が言った。それに続いて容姿の整った少年が言った。

「でも、マジでやばくなつてきたな」

「仕方ない、次に見つけた扉に入ろう、そこで聞けばいいだろ」

「その手があつたか、流石は雄一だね」

「雄一」と言われた赤い髪の男は手で頭をおさえて呆れたような口調で言った。

「それぐらいは気がついてくれ、明久」

そう言われた案内人は、

「まづい!! 早くしないとマジで遅れちゃうー!! 秀吉、ムツツリー
ー、一夏早く行くよー!!」

そう言って見つけた部屋に走る明久を秀吉、ムツツリー、ムツツリー一夏が追いかけて扉の前に立つて息を整え。

「　　「　　「失礼します」　　「　　「

そう言った五人は部屋に入るとそこには西洋風の鎧に似た機会が鎮座していた。

「これは、ISか？」

「何でこんな所に？」

「それはわからんが確かにISじゃ」

「・・・ミステリー」

「へえ～これがISか」

そうつ言って一夏がISに触れると、

- - - ギンツツツツツ - - -
- - - 皮膜^{スキゾバリア}装甲^{スラスター}展開、 . . . 完了。
- 推進機^{スラスター}正常作動、 . . . 確認。
- 近接ブレード、 . . . 展開。
- ハイパーセンサー最適化、 . . . 終了。

「 「 「 「 「はあ？」」」」

一夏は勿論、明久と雄二、秀吉、ムツツローも驚いて固まっていた。そして、

カタカタカタ - - -

数人の足音が聞こえてきた。

「おい！早く解除しろ！！」

「なんでだ？」

「馬鹿かお前は？見つかれば異例のエスを使える男という事で、 実
験体だぞ？」^{モルモット}

それを聞いて三人は納得し、一人は冷や汗を流し始めた。その時、「こらーーーそこでなにをしている、ここは関係者以外立入禁止だ・・・」

そこまで言つて部屋に入ってきた四人の女性は固まつた。

「馬鹿な、男でエスを使えるなんて」

「すぐさま上層部に連絡を取つて指示をもらひつわよ」

「　　はいーーー」

そう言つと一人は部屋を出て行き、三人が五人のいる部屋の鍵を掛けた。

「どうしよう、雄二」

「くせ、こなつては、手の内用がねえ」

「わしうまうなるんじや？」

「・・・わからない」

そう言つて四人は一步後に引きE.Sに手が触れた、その時。

「…………きん…………」

「…………あれ？」

E.Sが四人にも反応した。

「え～とここれはひょっとして反応しちゃった感じ？」

「どうやら、俺らにも反応したようだな

「…………はあ～」

翌日

「昨日、E.Sを動かせる男が、五人見つかつたとのE.S学園から正式な発表がありました。」

その日、五人はE.S学園に入る事が決定した。

第一話 女だらけのHIS学園（前書き）

ども、カルボナーラです。

わざわざ、戦闘まで持つて行きたいのがんばります。

第一話 女だらけのHIS学園

「　　「　　「　　はあ～」　　」　　」

五人は織斑家のテーブルに突っ伏していた。

「なあ」

「どうした?」

「俺達明日、HIS学園に入学するんだよな?」

「ああ、そのとおりだが?」

明日は、HIS学園の入学式だが五人は乗り気ではなかつた。

「これからどうなるんだ?」

「簡単だろ?マスクミミやう各國大使、遺伝子工学研究所の人間が来なくなる。」

変わりに、好奇の目が向けられるだらうな

「きついな」

「仕方ないじやろ、わし等は、異例の『HISを動かせる男子』なん
じやからうの」

「何を言つてゐるの?秀吉?秀吉はどう?」からどう見ても、美少女じ
やないか

「違うんじゃないやーー！わしは男じやーー！」

「そこまでにしどけ明久、明日からは、特にムツツリーには戦場なんだから、無駄な体力は使うな」

それで五人は解散となつた。

翌日 1・1教室 明久サイド

「全員揃つてますねー」

教壇に立つた副担任の山田先生（さつき自己紹介してくれた）が言った。

「それでは、SHRをはじめますよー」

• • • • • • • •

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも返事がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えつと、出席番号順で」

ちょっとうわたえていた副担任がかわいそうだから、僕ぐらい返事してあげようと思つたけれど、緊張感に負けて返事できなかつた。

なんだから？

簡単だ

僕たち五人以外のクラスメート全員女子なんだから。

しかも、席が真ん中の最前列の一列を使って僕、一夏、雄一、ムツツリーー、秀吉の順だ。

「……くん。織斑一夏くん？」

「は、はいっ」

僕と同じことを考えていたのであるが、一夏は声が裏返してしまった。

「あつ、あの、お、大声出しちゃって『めんなさい』。お、怒ってる？怒ってるかな？」

「ゴマンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まつて今『お』の織斑君なんだよね。

だからね、『』、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？

？

気がつくと山田先生が一夏にペコペコ頭を下げていた。

今は女尊男卑なだけあって、妙に偉そうに接してくる女性教師が多いが、どうやら、山田先生は違うようだ、もし、女性＝偉いの構図に沿つた対応をしてくる教師だったら、どうしようかと思つていて大丈夫そうだ。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……つていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対です
よ。」

がぱっと顔を上げ、一夏の手を取つて熱心に詰め寄る山田先生、
……一夏はまた、クラスか注目を浴びてるな。

しかし一夏はやると言つた以上やる男だ、一夏曰く『男子たるもの
引くわけにはいかない』らしい、
最初で溝を作ると一度とこの環境に馴染めないと想つて間違いない
だろう。

一夏はしっかりと立ち上がり、後ろを向いた。

(うつ……)

「（馬鹿な！あの一夏が戸惑つてゐるなんて…）」

「（ありえないだろー！）（うつ）（うつ）俺らの中で一番馴れでいる
あの一夏だぞ！？）」

雄一と明久、ムツツリー、秀吉は驚いていた。

一夏は五人の中で最も挨拶の時に緊張しない男だからだ。

その一夏が目の前で戸惑つてゐる。この事実は明久達は信じられないものだったのだ。

「えー……えっと、織斑一夏です。ようしくお願ひします。」

一夏は意を決したのかそう言つと頭を下げて、上げる。

すると、クラスの女子は『もつと色々喋つてよ』的な視線がとんだ。
そしてこの『これで終わりじゃないよね？』的な空気が出来上がつ

ていた。

一夏は俺達に『助けてくれ』といつよつな視線を送ってきたが、

「「「」（「メン無理だ）」「」」

とこゝの視線でのやり取りがあった。

自己紹介を終われない一夏。

何せ田の前には『もっと聞きたいなあ…』といつ女子からの期待に満ちた視線。

（一夏はこのまま黙つたままだと『暗いやつ』のレッテルを貼られてしまうな）

一夏は何かを覚悟したようだ。

「以上です」

がたたつ。思わずすつこける女子が数名いた。

（一夏にどんどんだけ期待してくるんだよ）

そう思つてると、

「あ、あのー……」

山田先生が涙田で声をかけた。

パンツ！

とてもいい音が響いた。

「いつ！？」

痛そうだ、と思うより先に僕達は固まっていた。
僕達の前にはよく知つてゐる人が立つてゐるのだから当然だ。
一夏も氣づいたらしくギギギッ！という効果音が似合ひそうなほど
ゆっくりと振り向いた。

「…………」

そこには、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、狼を
思わせるほどの鋭い吊り目。

「げえつ、関羽！？」「死神だと！？」「千冬さんじやと？」「魔
王だと！？」「…破壊神！？」

パンツ！ドスツ！スペパンツ！

「誰が、三国志の英雄か、死神や魔王、破壊神だ！あと、学校では
織斑先生だ、馬鹿者！」

「今僕だけ明らか威力が違つたよね！？」

「ゴスツ！
バタン！」

「教師には敬語を使え吉井」

「「「げえつ！鉄人！」」「

「ゴスツ！ゴスツ！ゴスツ！
ドサツ！」

「鉄人じやない西村先生だ」

「…なんで西村先生がここに？」

「貴様らは、問題児だからな、この俺が、お前達の面倒を見ね」と
になつた

「嫌な予感が当たつたか」

「どういづ」と？雄二

「簡単だ、俺達に面識があつて、
一人で俺達の脅威の対象であつた鉄人を送ることによつて、俺らの
行動を制限するということだ」

「つまり、わしらを逃がさないための保険といつわけじゃな？」

「そういうことだ」

「もしかして、鬼の補修もあるとこいづ」と？

「何が鬼の補修だ、もちろん補修はある」

正直悪夢であつてほしい、

鉄人の補修は『趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎という理想的
な生徒にする』という地獄である。

「あ、織斑先生、会議のほうは終わられたんですか?」

「ああ、山田君クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

あんなに優しい千冬さんのこえ初めて聞いた。

「い、いえつ。副担任ですからこれくらいはしないと……」

いつの間にか立ち直っていた山田先生が応えていた。

「諸君、私が織斑千冬だ。」

「諸君、私は戦争が大好きだ」

バシン

「誰が大佐か」

「…………!?」

痛い痛すぎる、回避も防護も許されないなんて、
しかも、意識が失うことすら許されないなんて鬼だ!-

バシン

「今何か、失礼なことを考えていなかつたか?」

「いえ、何も」

「ほつ」

バシンバシン

「すみませんでした！自分、調子乗ってました！」

「解ればいい」

「ゴホン、邪魔が入つたが君達新人を一年で使い物にするのが私の仕事だ。

いいか、私の言ひことはよく聞き、よく理解しない。出来ない者には出来るまで指導してやる。

逆らつてもいいが、私の言ひことは聞け。いいな」

なんと言ひ暴力宣言。

間違いなく一夏の姉の千冬さんだ。

だが、周りからは黄色い声援が響いた。
えつ、何で？

「キャー千冬様、本物の千冬様よ！」

本物じゃなかつたら怖いでしょ？が。

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から

別に南北海道でもいいじゃないか？」

「あの千冬様にじご指導いただけるなんてうれしいです！」

「私お姉さまのためなら死ねます！」

いや、命は大切にしようよ。

死んだらもう何も出来ないよ？たぶん

「…毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

千冬さん人気は買えないんだよ？

もつと優しくしてもいいと思つよ。

「さやあああああ！お姉様！もつと叱つてー罵つてー！」

……えつ？

「でも時に優しくして」

「そして付け上がりなによつて隕をしてー！」

大変だ、クラスの大半が変態だ。
けど、元氣でなによりだね。

「で、まともに血口紹介もできないのか？お前は？」

「いや、千冬姉」

バシーン！

「学校では、織斑先生だ、わつかも言つたばかりだろうが、
お前の学習能力は吉井並か？」

「失礼だな、俺は明久ほど馬鹿じやない！」

「失礼な、僕はちょっと人よりお茶目なだけだ！」

バシン！バシン！

「いい加減に学習しろ、馬鹿者ー！」

「…はー、織斑先生」

「とにかく、お前達も血口紹介しろ」

「はーい、吉井明久です、趣味はゲームです。よろしくお願ひしま
す」

「坂本雄一だ、趣味はゲームだよろしく頼む」

「木下秀吉じや、趣味は演劇、特技は声帯模写じや、よろしく頼む
んじや」

「…土屋康太、趣味は写真撮影、よろしく

「…モ」

「…モ」

「…モ」

馬鹿なー。ソニックウーブだと？

「1Jのクラスに男子五人とも揃つた」

「しかも、みんなかつこいい！」

「地球上に生まれてよかつたー！」

女子って皆こうだったつけ？

何でこんなにハイテンションなんだ？

「五月蠅いで静かにしろ」

織斑先生の一言でクラス全員が静かになつた。
織斑先生凄すぎ。

静まるごと、山田先生が織斑先生に質問をした

「ところで先ほどからいらっしゃるそちらの方は誰ですか？」

「紹介が遅れたな、特別に教育委員会から来た教師の方だ。挨拶をお願いします。」

「解りました、皆さんはじめまして、

今日からこの学園の教師になり、山田先生同様1Jのクラスの副担任になりました。

西村宗一です。一年間よろしくお願いします。」

「」「」「よろしくお願ひします」「」「」

「とじるで千冬姉」

パンツ！知ってる？千冬さん、頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいよ。

「織斑先生と呼べと何度も言えばわかる？」

「……はい、織斑先生」

「あや？ 周りが騒がしいぞ？」

「えつ……？、織斑君って千冬様の弟？」

「ああっ、いいなあ、ほしいな」

よし、最後のは聞かなかつたことにしよう。

ところで、何で僕達が I.S 学園の試験会場にいたかというと、配布された資料の手違いで、

藍越学園ではなく I.S 学園の試験会場に来てしまつたというわけだ。けど、それだけなら I.S 学園に入学するなんて話にはならなかつただろう。

あらうことか、僕達は男で I.S を動かしてしまつたのだ。

「ところで織斑先生、明久達と西村先生は知り合いなんですか？」

「ああ、西村先生は、小学、中学、高校、大学全ての教員免許を持つていて、
全ての教科を教えることの出来る教師だ、そして、中学での吉井達の担任教師だ」

そんなに凄かつたのか、鉄人は、そんなことははじめて知った、

鉄人は何でも出来ることは知っていたけど全ての教員免許を待っているとは、初耳だ。

「SHRは終わりだ。諸君らにはこれからEVAの基礎知識を半月で覚えてもらつ。

その後実習だが、基本動作は半月で染みこませる。

いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

なんという、鬼教官だ。

バシーン！

SHRの終わりを告げるチャイムが何かの打撃音でかき消された。

サイドアウト

一夏サイド

「あー……」

参ったこれはまずい。ダメだ。ギブだ。

一時間目が終わり。現在休み時間。廊下からは学年を問わずに視線が向けられている。

女子同士が牽制しあつていいで俺達は、どうすればいいのか解

らないでいた。

十年前に発表されたHISのせいでのせいで、世の中は、女尊男卑になり、『女性』といふ構図が出来てからは、

『偉い』

歩いているだけで、見知らぬ女性に『ちよつとセレのあなた、自販機で飲み物買ってきなさい』

といわれて、パシラされてしまつ。断ると警察を呼んで『いきなりこの人に殴られたんです』と言われただけで即逮捕だ。

そういう時に、突然対等な立場の人間が出でくると、当然、好奇心が湧くと言うわけで、廊下に人だかりが出来ていた。

しかも、俺の場合は、ブリュンヒルデの弟というプロフィールまでつくと、話がややこしくなる。

「ねえ、一夏？」

「何だ？」

俺の左隣に座つている、明久が話しかけてきた。

「僕達はこの学園に馴染めるかな？」

「それは難しいな、俺達以外女子のHIS学園において、変な動きはできない」

この質問に答えたのは雄一だった。

「しかも、わしらの唯一の休息も一週間でおさらばとなるじやうつ

しの「

「…下手な動きは鉄人がいるから無理」

「　「　「　「はあ～」」」」

「ちょっとこいか

俺達がため息をついてると、いきなり後ろから声をかけられた。

「…簫？」

「…………」

田の前にいたのは、六年ぶりの再開になる幼馴染だ。
篠ノ野簫。俺が普通つっていた剣術道場の子。

「屋上で良いか?」

「あ、ああ

「行つてらつしゃい、一夏」

「早く帰つて来いよ

「次の時間は織斑先生の授業なんじや、遅れるでないぞ、わしはまだ、友の亡骸を見たくないのじや」

「あ、ああ、急いで行つて、急いで戻つてくる」

「 「 「 健闘を祈る（んじゅ）」 「 「 」

屋上についてから篠は喋りかけてこなかつた。
呼んでおいてこれは酷いじゃないか？
仕方ない、俺から話すか。

「 わつじえば」

「 なつ、何だ？」

「 去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「 ……」

篠は、俺の言葉を聞くなり、固まつた。

「 何でそんな」としつているんだ？」

「 何でつて、新聞で見たし」

「 な、何で新聞なんか見てるんだ」

篠は、俺に新聞を見るなどいつのか。ひでえな。

「 あと、久しぶり。六年ぶりだけど、篠だつてすぐにわかつたぞ」

「 よ、よく覚えていたものだな」

「 当たり前だろ？ 幼馴染」とくらー」

「そ、そつか？」

「ああ、忘れはしないさ、大切な友達の一人なんだからな」

「そつか…」

「籌がいきなりへこんだ。whyy?なぜ?」

「やばい、あと少しで授業が始まる…走るぞ筹…」

「あ、ああ」

「セーフ」

「アウトだ、馬鹿者ー！」

「バシーンー！」

午前中だけで脳細胞が三万個死んだ。

第一話 女だらけのHな学園（後書き）

誤字、感想お待ちしております。

第一話 初対面なのに失礼な！ b y 明久（前書き）

いつも、カルボナーラです。

今度から、字を少なくして早く更新することにしようとします。

第一話 初対面なのに失礼な！ｂｙ明久

一時間目の休み時間、僕達は今後に関する疑問を話し合っていた。

「僕達の扱いつて、研究のサンプルについてとでいいの？」

「少し違うが、お前にしては上出来だな」

「わしらは今までに前例のない、男子のHS操縦者じやからの」

「……つまりは珍獸」

「それって酷くね？」

「仕方がねえだろ、実際のところ、俺らの存在は世界的な異例なんだからな」

「ちよつとよろしくて？」

「「「ん？」」「「なんじや？」「「へ？」」

「まあ…何ですか？そのお返事は？」

（（（何だ？））の時代に取り残された、古い漫画に出でたかうな喋り方の女は？））

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」「すまぬな。わしも、主のことは知らぬのじや」

「わたくしを知らない？」このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

「ふうんセシリヤアって言つのか。

「一つ質問いいよ」「代表候補生は国家工の操縦者の候補生だ、単語で解るだろ？」「そうなのか？」

「そう…エリートなのですわ！」

いきなり上機嫌になつたな。

「こいつの私とクラスを同じくするだけでも幸運なのですから。その現実をもう少し理解していただける？」

「……………」
「そうか。それはラッキーだ（じや）」「……………」

「……馬鹿にしていますの？」

失礼な。君が幸運だつて言つたんじゃないか。

「まあ、いいですわ。

わたくしは優秀ですから、貴方方の様な方々でも優しくしてあげますわよ」

「おお、この態度が優しさなのか。十五年生きてきて初めて知つたよ。これが優しさなら、一夏達はどんなだけ善い人なんだろ？」

「まあ・・・泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートです

から

「それならわしらも、倒したんじゃが？」

「はあ？」

「一夏のは、偶然と言つてもいいが、俺達は確実に倒したな

「雄」とムツツリーはほぼ瞬殺だつたもんね」

「わしらも少々時間はかかつたものの、勝つたからのつ

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではつてオチじゃないのか？」

あちゃあ、一夏は爆弾を落としちやつたよ。

キーンゴーンカーンゴーン。

「つ・・・・また後できますわー逃げなことねーよべつてー

よくない。でも言つたら怒られるだろつから言わないよつよつ。

次の授業で明久たちが大変な目に遭う事は誰も知らない。

第一話 初対面なのに失礼な！ｂｙ明久（後書き）

明久を鋭くしそぎた気がするのは氣のせいかな。

誤字脱字があればよろしくお願ひします。

感想おまちしてます。

第三話 カルボナーラをしたくてマジシロー（誕生日）

いつもカルボナーラです。

やつとテストが終わったのでのんびりできる。

第三話 お前はもうやり切れないとアラシリー

「授業を始める前にクラス代表を決めなければな、クラス代表とはそのままの意味だ。

対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席など、簡単に言うとクラス長だ。

一度決まると一年間変更はないから今のつもつ

ずいぶん面倒くさうな役職だな。

先手を打つて奴等の動きを止めるか。

「はー！織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います！」

「……俺も（僕も）（わしも）、一夏がいいと思ひせ（こまゆ）（えじや）」「」「

「はあ？なら俺は、ムツツリーーと明久、雄一、秀吉を推薦するが

「……一夏…なん？」とをしゃがる。「」

「……なぜ俺を？答え次第では許さない。」

「わしまで推薦しようって、なんて」とをしてくれたんじゃー。」

「ちよ、ちよと待つたー俺にやらせようとした奴が言える事かー。」

「んんっ、とにかく他薦されたものに拒否権はない

くそつ、明久や雄一が推薦されても俺がやられる」とは無いと思つていたのに。

バンツ！

「待つてください！納得がいきませんわ！」

そう言い、机を叩きながら立ち上がったのは、セシリ亞だった。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！」

わたくしに、このセシリア・オルゴットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「この人はなぜ男をそこまで怒らせたがるのかわからん。

「大体、クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「……ずいぶん自信があるじゃないか」

「なつ！」

「ムツツリー、もしかして怒ってる？」

「……なんのことだ？」

「もしかして無意識で言つたやつたの？」

「しまつた」

「あなた、今自信がどうとか言ってましたわね？」

言つてしまつたならしょ「うがない。

「確かに言つたが？」

「勿論ですわ、少なくとも、あなた方よりは、強いですわ！」

「…その自意識過剰な考え方、いつか自分を苦しめるぞ」

なんですか！あなた！わたくしを侮辱しますの！？」「

「先に侮辱したのはお前だ」

一決闘ですわ！」

—お前じきに遅れば取らない

ムツツリー — said out

用 -

「言い切ったな」

「そうだね、ゲストの秀吉さん、この後どうなりますかね？」

「セウジヤなあ、ここの後はムッシコーーが決闘を挑むんじやないかの？」

「なるほど、実況の雄！セイ、どうでしょ？？」

「やつだなあ、ここのままでけば、俺達が巻き込まれる確立が高いだろつな！」

「どうして？」

「ムッシコーーが決闘を受ければ俺達も参加しなきゃいけなくなる」

「僕たちまでなの？」

「当たり前だ、馬鹿だなあ、いいか、この話の発端は代表に誰がなるかということだ、その候補として俺達も選ばれているんだ、そして、あいつが言った実力の話がでてくるといつ訳だ」

「…逃げなきゃ…！」

「逃げられると思つが？」

「「鬼神襲来…！」」

バシン！バシン！

「「頭があーー。」」

「誰が鬼神だ」

明久 said out

「「頭があ～！！」

- ?

「何事ですか？」

「んんつ、とにかく、勝負は一週間後の月曜。放課後に第三アリー
ナで行う。

緑珠　土屋　吉井　坂本　木下　不リ――には準備しておぐよ――はでは授業を始める。

۲۷

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「よかつたな一夏」

「ああ、これでお前らの仲間入りだな」

۱۰۷

どうしたんだろう、クラスの空気が変わった。

「もしかして、吉井君達も持つてるの?」

「言つてなかつたか?」

「そういえばあの時に初めて使つたし、カメラで取られていた時は試験用工Sだつたからね」

「まあその話はおことこして、おめでとう、一夏

「おめでとうじゃ

「…おめでとう

「よかつたな、一夏

「それでは、授業を始める」

第二話 エンジニアリングがなにか（後書き）

感想お待ちしています。

第四話 気絶せせて黙りせぬつか… b ゆ雄一（前書き）

「いつもカルボナーラです。」

感想どうもありがとうございます。」

第四話 気絶させて黙りこなしか… b シ雄一

キーンゴーンカーンゴーン

「やつと終わった~」

ようやく五時間目授業が終わり、家に帰らうとした時に

「織斑君達まだ教室にいたんですね。ちよびよかったです。実は、寮の部屋が決まりました。」

いきなり来た山田先生にそう言われて

「僕達つて一周間家からの通学のはずですよね?」

「そのはずだつたんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したり、

教員室と物置として使っていた部屋を掃除して何とか確保したんです。

そして、一人部屋が一つ、相部屋が一つなんですが、部屋割りは織斑君達で決めてください」

なんといつことだ、僕達のパラダイスが一部屋と後は普通に過ぐせる部屋か、これは

「ならじゅんけんで決めるか? ムツツリーーーを除いて

「…なぜ俺を抜く?」

「なら聞くが、お前は女子と一緒に血の海に沈まないでこいつらのと
いつのか？」

「問題ない、365通りのショリレーントをして365通りの出血を
確認した」

それを聞いた瞬間皆黙た。

「あつ、あと、同室の相手は篠ノ内さんです」

「よし、明久が相部屋で決定だな、あとは俺達で部屋割りを決める
か」

「（ ツク ツク ）」

「ナハジやな」

「じつと決めるよ。」

「ちよつと待つてよーなんぞそつなるんだよー。」

「　　「　　「　俺達はまだ死にたくない（んじや）―――」」

「僕だつてまだ死にたくないよー。」

「じゃあ吉井君が相部屋ですね？」

「山田先生までー？」

「あきらめの明久、骨は拾つてやる」

「何事か、騒々しい！」

「「げえ、鉄人」」

ゴン・ゴン・

「ぐはつ！」

「頭があ～！」

「鐵人じゃない、西村先生と呼べ」

うわあ、すっつづけえ痛い。

「部屋割りは、織斑君と木下さん、坂本君と土屋君で相部屋が吉井君でいいですね？」

「理不尽だあああ！－！－！」

五月蠅い

バシーン！ ガツン！

「両サイドからのとんでもない威力の出席簿と拳がとてつもなく痛
いいいい！！！」

いつの間に来たのか織斑先生も明久に出席簿を落としていた。

「ところで、山田先生、なぜ今わしだけ「くん」ではなく「さん」

で確認したんじゃ？」「

「あ、すいません、木下君でしたね」

「今日は注意だけじゃが、次はそつまいかぬから覚悟しておいてほしいのじゃ」

「わ、わかりました」

山田先生は脅えながら、ダーク秀吉（一夏命）の言葉に了解した。

そして、明久は

「何でこの理不尽な結果を受け入れなきやならないんですか！？」

「大丈夫だ、お前は簡単には死ない」

「理不尽すぎるでしょう。」

「教師には敬語を使え！」

ゴン→バシーン！

「すいあせんでした～！自分調子～していました～！」

土下座をしていた。

「「わかればいい」」

「「とこりで雄一やつぱつじょんけんで決めよう」」

「何でだよ！」

「今すべてが丸く収まつたのにわざわざ変える必要がどじはある？」

そヽヽたぞ明夕 あをひおで遡^{アシテ}て来レ」

なんなかしきなし

傳記

「とにかく、じゃんけんで決めるなり他の方法で決めないかぎり納得しないからな！」

「大丈夫だ、お前が納得してなくても俺達一（私）が納得している」

「理不尽すぎるだろ！しかも、何で織斑先生と西村先生まで入つてるんですか！？」

気づいたら織斑先生と鉄人まで入っていた

一面倒だな」「うな」「たら、気絶させて送るしかないか」「

「やがてね、やがて誰か？」

ちよ、ちよ」と待つてください。何で、

唯一の常識人かと思っていた山田先生まで入ってるんですか？」

「気づいたら山田先生まで参加していた。

「明久が静まらないようだから仕方ない、じゃんけんで決めよう」

「最初からそうしろよ..」

「　　「じゃんけん、ポン！」」

明久グー、雄二ー、一夏、ムツツリーー、秀吉パー

「よし決まった」

「負けたあああ！」

「　　「五月蠅いー.」」

バシンー！ゴスー！ゴツー！ドンー！ガス！

ドタ！

「やつと沈んだか」

「長い戦いだつたな」

「とつあえず荷物の」ともあるから一度帰るか

雄二ーがやつと沈んだか

「その」となら気にしなくてもいい、荷物なら、私が手配しておい

た

「 「 「 「あ、ありがとう」「やれこやか」」」

「必要最低限のものだけだがな、携帯の充電器と着替えがあれば大丈夫だろ」

「俺の荷物はこんなことがあるかとまとめておいてよかつたぜ」

「流石雄一だな」

「…俺達の荷物はいつたいビリーハー？」

「事務室に面しているはずだから取つてから部屋に行くよ」

「わかりました、秀吉、悪いが明久を起しててくれないか？」

「承知した」

そう言つと秀吉は明久に近づき

「明久よ、早く起きるのじゃ」

強く揺さぶつた

「・・・んん、秀吉?」

「早く仕度するのじゃ、もう行へんじや」

「わかったよ」

「吉井君が1025室で織斑君と木下君が1026室、坂本君と土屋君が1024室です」

「わかりました、行くぞ」

「わかった」

「了解」

「承知したんじゃ」

そうして俺達の高校生活の一日が終了した。
隣の部屋がやけに五月蠅かつたがきのせいだろう。

第四話 気絶させて黙りせんのか… b や雄一（後書き）

感想お待ちしております。

次回はムツツリーー一大活躍かも？

明久、雄一、秀吉、一夏、ムツツリーー「」「」「」「」これからもよろしく…」「」「」「」

第五話 ムッシニーって強かったんだなｂｙ一夏（前書き）

久しぶりの投稿です。

テストも検定も終わって、やつくりできると感ひひととも嬉しいです。

第五話 ムツツリーーつて強かつたんだなｂｙ一夏

翌日 食堂

朝の食堂で一夏と秀吉、雄一が食事を取つていると、遅れて明久が来て、

「雄一」

「なんだ明久、つまらない用ならチョキでしばぐぞ」

「なんで昨日助けてくれなかつたんだよ！」

「何かあつたか？」

雄一は、いきなり明久に怒鳴られて何かあつたかを考えていた
すると、明久が肩を落として小刻みに震えだして

「ちょっとね…殺されかけたんだ…」

その言葉を聞いて、三人は何があつたかを悟つて慰めていた

「よく生きて帰つてこれたな、明久」

「昨日の大きな音は、明久の部屋からじやつたのか」

「そうだつたのか、大変だつたな、明久…いつでも逃げてきていいぞ」

「ありがとう一夏、今度危なくなつたら逃げ込ませてもらひつよ」

「雄一と一夏と秀吉が慰めてくれて少し涙目になつていた。
こんな会話をしていると周りに陣取つていた娘達が

「吉井君、昨日凄かつたよねえ～」

「ほんとだよねえ～、まさか真剣白刃取りを間近に見ぬ」とができるなんてねえ～」

これには、一夏と秀吉が苦笑いして、雄一が温かい目で見ていた。
そして、明久は再び震えだしていた

「…………」

「…………」

「そんなことより、雄一、ムツツリーーは？」

そう言われて、一夏と秀吉が辺りを見渡してムツツリーーがいない事に気がついた。

「三人とも今日が何の日だかも忘れたのか？」

そう言つと一人は、わかつた様な顔をしたが明久だけ

「今日つて何かあつたっけ？」

「 「 「はあー」 」

「何だよー。そのため息はー。しかも、シンクロ 同調して言つたなー。」

三人は再びため息をしていた

「明久、今日はオルコットとマッソリーの試合の日だろ?」

雄一がそう言うと明久が

「や、やだなー。雄一そんな事忘れている訳ないだろ」

「完全に忘れてたな」

「そうじやな」

「まあそりゅう事にしておいてやる」

「けど、そしたらなおさら朝食を食べないと駄目だろ?」

明久がいきなりそんなことを言って、一夏が同意してくれた。

「確かにそりゅうだよな、朝食を食べないと力が出ないだろ?に」

すると、雄一が額に手を当てる

「ムツツリーーが女子と戦うんだぞ?しかも、相手はイギリスの代表候補生でスタイルがいい」

雄一の言葉を聞いて、二人が

「「鼻血の海が出来上がるね」」

「だからこそ、輸血パックを取りに行ってるんだろうよ、食事一回より命が大切ということだらつよ」

そう聞くと明久が何かを察したように

「なら僕達も準備しなきゃね」

「そうだな、AEDと田隠しと棺桶とやっぱ輸血パックも持つておいたほうがいいかな?」

「こちよつ持つて行つといったほうがいいだらうな」

「棺桶の用意はしないでいいだろ……」

明久と雄一の会話を聞いて一夏が突つ込んでいた

「わしは、ムツツリーーの様子を見に行つて来ようかの

「よしそうと決まれば早く飯食つちまおうぜ」

そう言つと、四人とも食事を終えた後、それぞれが走り出した。

- - - - -
ピット内

一夏は、山田先生に言われてフィットティングをしながら明久と話し

ていた

「一夏はフィットティングもしなきや駄目なんだよね？」

「そりなんだよな準備のほうは任せたぜ、明久」

すると明久は一夏に拳を向けて

「大丈夫だよ、準備はもうできてるし」

「その手に持ってるものは何だ？」

手に持っていたのは、康太に渡すはずの目隠しが

「「「これは！」」

流石の一夏も動搖を隠せずにいた

それもそのはず、たつた今明久は準備ができたと言つてはいたし、康太が目隠しをせずに、アリーナに向かおうとしていたのだから

「明久、手に乗れ思いつ切り投げる！」

「そんなことしたら僕が死んじゃうよー！」

すると雄一がこの事態に気づいたらしく、康太を止めて

『明久、さっさと目隠し持つて来い！』

いきなり康太の隣にいた雄一が明久を呼んだ
そして明久の持っていた目隠しを受け取ると、康太はつけはじめた。

すると、雄一は真剣な表情をして

「ムツツリーー、目隠しだけは何があつても外すなよ、ハイパー・センサーで視力が上がっているお前が女子を見たら大変なことになる」

「…ア解、行くぞ、風魔！」

目隠しをつけ終えた康太が、一瞬光に包まれたら、ISを纏った姿で立っていた。その姿は、いかにも『機械の忍者』というような格好で、アンロック・ユニットは無く変わりにマフラーのように首に巻いた一枚の布が宙に漂っていた。

そして後ろの腰には小刀が、左右にはクナイがマウントされていた。両腕には、籠手のようなものがついていた。
明久たちは

「速攻で倒せよ」

「油断しないで頑張れ」

「頑張つて勝つてくれるのじゃ」

「…行つてくる」

そう言つと、康太は飛び立つた。

康太 said

明久たちの応援を受けて、アリーナのオルゴットよりも少し下に浮かんでいた。

「…待たせた」

「あらあら、逃げずに来ましたの?」といりで、その田嶋じは向の真似ですの?」

安い挑発だな

「これは、ハンデだ、さつさと来い雑魚!」

やつ山つひとホルゴットは、顔を真っ赤にして

「な、なんですってえー! チャンスを差し上げよつと思つましたが、もつ差し上げませんわ!」

そつ言いながら銃で撃つてきたがレーザーは俺には当たらなかつた

「…言つた筈だ、お前程度に遅れは取らなこと!」

俺はオルゴットの上空に移動しそのまま一本の刀で切りつけそのまま蹴り落とした。

「早く本氣を出さないとすぐに終わるぞ?」

「もう怒りましたわ! 踊りなさい! わたくしとブルーティアーズの奏でるワルツで!」

そう言つとオルコットの後ろから四つのブルーティアーズ（以下ビット）が飛んできてビームを撃つてきた。

「面倒な」

「さあ、わたくしを雑魚呼ぱわりしたことを後悔させて差し上げますわ！」

「うへー！」のままやられる訳には行かない！」

そう言って後ろに回りこんできたビットの一つにクナイを投げ爆発させ、その爆風を利用して残りのビットを切り裂いた。

「……これで終わり！」

「掛かりましたわ、ブルーティアーズは六機ありますよ！」

すねて後ろの「ジエ」から「あらを向むけ」サイルを打ち出した。

卷之二

トッカーン！

ピット内

康太がセシリ亞を圧倒していた映像を見て、一夏と山田先生と篠が驚いていた。

「ムツツリーーーってこんなに強かつたのか？」

一夏が驚いてる組の代表として質問してみた、
その質問に雄二が答えてくれた。

「元々ムツツリーーーの身体能力も常人離れしているのに、さらに、
ISで強化されているんだ、
代表候補どころか、国家代表ですら下手すりや見失うだろ？」「やうやく

「土屋の足の速さや反射神経は俺と同等かそれ以上だ、
そんなあいつがさらに速くなつたのだからついて行けるのは織斑先
生のような、
モンド・グロッソの優勝者くらいだろ？」「

雄二の言葉に西村先生が付け足すように言った。
「どうか、いつの間に来たんだ？」

そんなことを思つていると、

ドッカーン！

「やばい！一夏はタンカの準備を、秀吉はAEDを持つて来い！明
久は、俺と一緒に輸血の準備だ！」

そう言つと、四人は準備を始めて30秒で準備を整えた。

「いつたいどうしたというのだ？」

康太は、ミサイルの直撃を受けたといつても、絶対防御があるので

から怪我はしていないだろ！？

その質問に答えたのは明久だつた

「僕達は、怪我じゃなくして、マジシローーーの『命』の心配をしてるんだよ、

今の爆風で、もし日陰しが外れていったら大変なことになる」

そう言うと囚人は、険しい顔をしてモーターを見ていた。

アリーナ

煙が晴れて康太は地面に吹っ飛んでいた
康太の目には、目隠しがついていて、明久たちはほつとしていた頃
康太は、攻める準備をしていた

「まだ立つてこひしゃるよひですかね？」ながいが、それでフイナーレですわー！」

そういうとホールガトは二サイルを六発撃つて銃で撃つてきた

「終りひがい」の世界

そう言うとレーザーを避けて、ミサイルを切つたりクナイで落として加速し、

オルコットの前に着いた、そしてそのときに事態が起きた。康太のつけていた目隠しが切れて外れてしまったのだ。

「…っくー」ブツツツツツシャアアアアアアア！――――――――――

勢い良く鼻血を出して落ちていった、
オルコットはいきなり田の前で落ちてゆく康太を見て放心状態になつていた。

その頃、明久たちは、

「まづい！三人とも行くぞ！」

「おうー」「了解！」「承知！」

そういふと四人はエスを展開して康太のもとえと飛んで行つた。

「土屋さん、大丈夫ですか！？」

オルコットは康太の隣に降りて強制解除されて倒れている康太の下に駆け寄つた。

そして明久達は、すぐにその場に着き

「オルコットさんじいて！」

「エネルギー310チャージ！」

「チャージ完了じゃ！いつでもいけるぞ、明久！」

「蘇れ！蘇るんだ！ムツツリイー！――――――

ビリビリビリビリ――――

「よし安定してきた後は、輸血しながら揺らさないように慎重に行

くぞー！

「「」「解ー！」」「承知ー！」

そいつ言ひつと雄一達はムツツリーーを保健室へと連れて行つた。

その後、応急処置をしていた明久達の姿を見ていた教師は、

「見事な応急処置だつた、30秒ほどでやり遂げるとは思わなかつた。」

と、語つていた。

第五話 ムッシローー！って強かつたんだなｂｙ一夏（後書き）

感想お待ちしております。

第六話 やはり明久は馬鹿じゃ の「ひょく秀吉（前書き）

ムツツリーーをちょっと優しく書いてみました。

第六話 やはり明久は馬鹿じゃのうひょく秀吉

康太を保健室に連れて行ったあと、オルコットに謝られた。幸いな事に康太は、明日には学校に通う事が出来るようで、保健室の先生が明久達の応急処置を褒めていた。

明久達は食堂で夕飯を食べていた頃、セシリアは保健室の前で立っていた。
康太に謝るために来たのだが、中から鉄人と康太の話がきこえたのだ。

「土屋、このブレスレットをつける」

「これはいつたい？」

鉄人は康太に解るように説明をし始めた。

「これはリミッターだ、お前のHSは普通のHSの三倍ほどの速度が出る、それを抑えるための物だ」

「…なぜそのことを？」

康太は驚いていた、実際に速度は三倍は出る、だが、まだ明久達しか知らないはずのことを鉄人が知っていたからだ。

しかし、鉄人はこの反応に対しても

「やはりお前と吉井木下には補修く拷問>が必要なようだな…」

「理不尽だ」

「当たり前だ、お前の機体とラファール・リヴァイブのパラメーターを見たらすぐに判るだろうが！」

その程度のことも理解できないなら、教えるのが普通だろ？」

そのことを聞いた瞬間に恐ろしい光景を想像してしまった。

その光景は、鉄人と織斑先生による補修現場である。

「…生徒を殺す氣か？」

自然とその言葉を口にしてしまい、鉄人の拳骨をもらい、悶え苦しんでいると鉄人が真剣な顔で話し始めた

「今日の試合、最初から本気でやればお前なら被弾なしで勝てただろ？、なぜ本気でやらなかつた？
さらにお前は避けることのできるミサイルをわざわざ当たりに行つた、なぜそのようなことをした？」

「…それは…」

康太は黙ってしまった、実際は、避けることも可能だつたミサイルがあえて当たりに行つたことにも理由はある、だがしかし、その理由を言うわけにはいかないと考えていた

そして、鉄人が口を開いた

「これはあくまで俺の予想だ、

お前はオルコットの態度を直そつと考えた、だが、相手は代表候補生でプライドの高いオルコットだ、

お前は被弾して追い詰められて偶然勝つたように見せかけて、

相手のプライドを傷つけないようにしながら態度を直そうとした、だが、誤算は目隠しが外れてしまったことだろう。」

「……」

康太は驚いた顔をしたが鉄人は「やはりそうだったか」と言い康太に
「先程オルコットが代表を辞退すると言つてきたこれでお前が吉井、
坂本か木下か織斑になつた、

明日、織斑先生から指示があるだろう、寮に戻つてゆっくり休むといい」

そう言つと、鉄人は立ち上がり部屋を出て行こうとして、振り返り

「あと、オルコットの件は内緒にしておいてやるわ」

と言つて出て行つた、康太も着替えて寮に戻つて行つた。

翌朝

「それでは、一年一組クラス代表は織斑一夏君に決定です。あ、一
繫がりでいい感じですね！」

「はい？」

一夏は山田先生の言つた事で変な声を出してしまつた。

「先生、質問です」

「はい、何ですか織斑君」

そつ言つと一夏は

「何で俺が代表なんですか？ムツツリーーとセシリアが勝負して、セシリアが勝つたはずですよね？」

そつ言つと田先生はいつもよつ堂々と

「それは「わたくしが辞退したからですわ！」はうう、私が答えようとしたのに……」

答えられずに、拗ねてしまった。

「ならムツツリーーがやるんぢゃないのか？」

「「「「俺達、昨日のうちに織斑先生に断つておいた」「」「」

康太が寮に戻る途中に雄一に電話をかけて織斑先生の部屋に四人で断りに行つたのだ。

「畜生、そういうのは、明久の担当だろ！」

「僕の担当つて何だよー！」

「本当はそうするつもりだったんだが、話てるところを見つかってな、確実に落と…代表を任せられる一夏にしたわけだ」

「本当はってなんだよ雄一ー！」

そんなことをすると鉄人が明久の後ろに回り

「つるさこぞ、吉井！」

「ゴスツ！」

鉄人による拳骨をもらつた

「何で僕だけなんですか」

「それはお前が一番つるさかつたからだ吉井」

鉄人に怒られているうちに、織斑先生が

「では、代表は織斑、副代表は吉井、坂本ということで決定だ！」

そう聞いた瞬間

「「何いい！？」

「つるさこぞ！吉井！」

「ゴスツ！」

明久は鉄人に怒られている途中で反応したせいで再び拳骨をもらつた

「明久は良いとして、何で俺まで副代表なんですか？」

「それは副代表が一人必要な中で吉井を提案してきたし、お前は筆記テストにおいて織斑同様、

全教科満点で学力も申し分ないから私が推薦しておいた、どうだ、嬉しかる？』

「あ、ありがとうございます」

すると、周りは

『織斑君と坂本君って頭良いんだ！』

『テスト前に勉強教えてね！』

などと盛り上がっていた。

その頃吉井は、教室の後ろで土下座していた、それをひいひいと心配そうに見ている女子が一人いた。

第六話 やはり明久は馬鹿じゃの「ひょく秀吉（後書き）

一夏と雄一をかなり頭良く書いてしまった気がする。

感想お待ちしています。

アンケートですが鉄人に工事を持たせるか持たせないかを聞きたい
と思います。

期限25日までとやらせてもらいます。

第七話 酷いよーおつむー！—ちゆのほほんわん（前書き）

アンケートのほうが綺麗に分かれたので鉄人はT-Sを持たせない方
向で書きます。

第七話 酷いよーおつむー！—ちくのほほんわん

朝、明久と雄一と康太の三人は食堂にいた。

秀吉と一夏は早起きしたらしく、この時、食事を終えて、部屋で着替えをしている途中だった。

明久 said

食堂で明久達は筈とセシリ亞も今流しての朝食を食べていた。

雄一はトーストとベーコンエッグにサラダとコーヒー

筈は焼鮭定職

セシリ亞はBLTサンドに紅茶

康太はクロワッサンにコーヒー

明久は食塩水とパンの耳（食堂のおばちゃんがくれた）を食べていた。

「明久、今日はパンの耳があるじゃないか、いつたいどうしたんだ？」

「実はわっしゃ、おばちゃんがくれたんだよ、一週間も食塩水と砂糖水だけの生活だったから心配してくれたみたい」

それを聞いたセシリ亞は

「一週間も食事を摂らなかつたんですねー！」

「いや、わっしゃんと食べてるよ、食塩水と砂糖水」

「それは食べてるところのか？」

幕に突っ込まれて考える明久を呆れたように見る雄一達するとセシリアが

「康太さんはほかの男性に比べるとあまり食べませんのですね」

「…朝から血が足りないから食欲が無い、今は輸血パックがほしい」

「…言つたら雄一がどこから出したのか、輸血パックを康太に渡した

「…ありがと」

「今度から携帯しどけよ」

「けど雄一、何で輸血パックなんか持つてたの？」

明久がその場にいる皆を代表して質問した

「ムツツリー二が倒れるかもしれないからな、念には念を入れて持つておいたんだ」

「そういうことか」

納得したように四人はうなずいていた

「それに下手すれば俺はもうすぐ地獄を見るしな…」

「雄一の呟きは誰にも聞こえなかつた。」

一方その頃

一夏 S.A.D

一夏は秀吉と一緒に先に登校していた

「おひな～。おりむ～、ひよりん」

寮を出たらすぐ近いところにながら寮から出て来たのは、袖の長い制服を着た布仮本音、通称のほほんちゃん（一夏命駄）だ。

「おはよ～、のほほんさん」

「おはよ～じや、といひで、わしの呼称は『ひよりん』で決定なんかの？」

秀吉は呼称が気にいらないのか不機嫌になり、のほほんさんに聞いていた。

別に、良いんじゃないか可愛くひと一夏が思つていたら

「一夏よ、後で少し、O HANNA SHIHOHいつかの？」

なんで心を読めるんだろうか？

「一夏は考えていることが顔に表れるんじや」

いつのまにかダーク秀吉となつていた秀吉の後ろに鬼が見えはじめっていた

「「」みんなセー」

まあまあ、ひとりん落ちついで」

一夏が土下座をしているとのほほんせんが、ひりひりと袖を揺りしながら秀吉を落ち着かせていた。

話題を変えないとまずいと思つた一夏は考えて、ふと疑問が浮かんできた。

「のほほんさん、今日は何でこんな早いんだ？」

いつもなら俺達が食事を終えて片付けている途中に食堂に来るぐら
いだから、

のほほんさんは、起きて学校に向かう俺達といふ。すると、のほほんさんが手を腰に当てて偉そうにして

「なんと、私は生徒会のメンバーなのだが、
それで今日は朝から集まることになつてゐるから速いんだよ~」

「なんだつて～～！～～～」 「なんじやと～～！～～～」

俺達はその言葉を聞いて思わず叫んでしまった。

ている生徒だ

「いきなり叫ぶなんて酷いな」

そう言いながらパシパシと呴いてくるじぐわは、とても可愛かつた

「それよつもおつむ～」

「なんだ？」

「今日転校生が一人来るみたいだよ～」

「なんと、それは本当かの？」

秀吉は機嫌が直つてゐるようで、話に混じつてきた

「ほんと～だよ～、ちなみに一人とも一組に入るんだつて～」

「やうなのか、このまま立ち止まつたままだと邪魔になるかもしけないから、そろそろ歩き始めよつか」

そう言つと俺達は歩き始めて
のほほんさんが話しかけてきた

「おりむ～の工ひつて倉治総研で作られたものだよね～？」

「へ～そうだけど、それがどうしたんだ？」

そう言つとのほほんさんは一夏に迫つて

「四組に日本の代表候補生の更識 簪つて子がいるから謝つておいたほうが良いよ？

おりむ～の工ひを急いで用意してたから、かんぢゃんの工ひまだ出来ないんだよ～」

「やうだつたのか、といひで今『かんぢゃん』って言つてたけど知

り合になのか?』

『やうだよ、私はかんちゃんの専属メイドなのだよ』

再び衝撃的事実に叫んでしまった一夏と秀吉はすでに校門前に着いていたので、

朝練がある生徒から注目されていた。

基本的にほほんさんをメイドにするのは間違つてことと思つ。かえつて仕事が増えそつた気がするから…

「ああ~、おりむ~今失礼なこと考えたでしょ~」

そしてまたパシパシと叩かれていた、一夏と秀吉はふと疑問が浮かんだ。

『やういえば、さつきの話から予想して、更識さんは専用機を持つていなかの?』

『やうなんだ、倉治総研の人達は『白式』^{イフライヤ}の後付装備に入る装備を開発中だとかで、

かんちゃんの『打鉄・式式』の開発を止めちゃつてるから、かんちゃんが引き取つて、今頃は、

整備室で組み立ててこる途中だと思つよ~』

一夏はそれを聞くと走り出して途中で振り返つて

『悪い秀吉、俺の鞄机の上に置いといてくれ』

そう言つて一夏は走り去つた

「おつむ～は偉いね～」

のほほんさんは一夏がどうするかがわかっているよひで、一夏を褒めたら、一夏を追って行ってしまった。

秀吉も一夏が何をするかがわかつたから、教室へと向かつた。その途中で秀吉は

「のほほんさんは集まりがあると言つておつたのはゞじやが大丈夫かの？」

そう思つていた。

予断だが、放課後に学園中に某電氣鼠のような悲鳴が聞こえたそうだ

一夏 said

整備室に着いた一夏は、室内でHISのヒーターをこじつている女の子へと走つて行き

「すいませんでしたああああ……！」

「きやつー！」

と言つながらジャンピングスライディング下座をした。

勿論の事だが女の子は驚いていた。

軽く悲鳴を上げるくらいに…

そんなことはお構いなしに話し始める一夏

「俺のせいで専用機の開発が止まつたつて聞いて、俺はそんなこと知らなかつたからすぐに誤りにこれずにはいませんでしたあああ！」

それを聞いて女の子はやつと謝罪の理由がわかつたよう

「大丈夫だから……そんなに……謝らない……で」

そう言うと再びデータをいじり始めた。

それを見て一夏は良い事思いついたと言わんばかりの顔をして

「更識さん、俺にも何か手伝わせてくれないか？」

こんなでお詫びになるとも思わないが、何か手伝わしてくれ

「そいつ言ひと一夏は簪の前に回り込み簪に言つた。

「なら私のことは名前で呼んで、苗字はあまり好きじゃないの」

簪のはつきりとした口調に一夏は了承して、明日から手伝うことを約束した。

その場を影からこっそりと聞いている人物に気づかなかつた二人は整備室を後にした。

その影にいた人物はのほほんさんだが、いつものようなおどけた雰囲気とは違ひ真剣そのもので、

「おりむへ、かんちゃんを泣かさないでね……」

一人になつた整備室では誰もこの言葉に返事をくれなかつた。のほほんさんは整備室を後にするといつもの雰囲気に戻つていた。

第七話 酷いよーおつむー！—ちゆのほほんわん（後書き）

次回は、転校生の正体が明らかに！

作中にヒントが出たので気がついた人もいるかもしれません。

感想お待ちしています。

第八話 私を無視するとはな…… b y 千冬

明久達が登校してきて数分後に一夏が戻ってきた。
一夏は自分の席に座ると皆と雑談をしていた。

・・・悲鳴が聞こえるまでは。

「ぎやああああああ…………！」

「何だ！？今の悲鳴は？」

悲鳴のするほうを見ると雄一が女の子にアイアンクローをされて少し浮かんでいると言つ、奇妙な光景が出来あがつていた。
そして、驚いたようにその光景を見る少女を見て

「ん？あれ鈴？」

「鈴？お前鈴か？」

「へー？そ、そうよ中国代表候補生、鳳 鈴音よー！」

後ろの出来事に驚いているところを一人に見つかった鈴は、少し予定と違うと心中で思つていていたのだが、

「久しぶりだな鈴」

「久しぶりだね鈴、三年ぶりくらい？」

いきなりの登場で驚かせようと思っていたのにばれてしまつ混乱している鈴に一夏たちは、声を掛けると

鈴は少し体を震わせてもう一度しつかりと宣戦布告しようとした。

「…雄一、浮氣は許さない。」

有無を言わせぬアイアンクローラーで雄一を締め上げている女の子。
あえて聞こう、何があったか？

朝

明久が支度に手間取つてゐる時に雄一と康太は先に行くと言つて出てきた。

そのまゝ少し歩くと

「ムツツリー、荷物を机の上に置いといてくれ！」

「……」雄一は、寮へと走り去った。寮へと走つて寮へと走り去つた。雄一に忘れ物かと思つたが、ビヨン――。

もの凄い速さで走り抜けて行つたもう一人が寮の中へと入つた瞬間

「追いかけてくるな～～～～～～！」

と言う声が聞こえて、康太は

「今日も平和」

と言い歩き出すと後ろから来たセシリアと登校した。途中幾度も倒れかけたのは勿論だつた。

雄一 said

「（何でだ！？何で翔子がいるんだ！？）
今朝ムツツリーーーと登校していく良く知る幼馴染に似ていると思えば本人が着てているだと。」

今現在雄一の後ろを走つて追いかけている女の子、翔子はE.S学園ではなく藍越学園に通つているはずなのに、なんでE.S学園の制服を着てているんだ、と雄一は思いながら逃げている。

「…雄一、何で逃げるの？」

雄一は覚悟を決めて窓からダイブ、二階からなら「へりなんでもやらないだろつ、

ドンードン！

ん？いま着地音が一つ、俺の分とまさか…

「雄一、逃がさない！」

「畜生！何でついてこられるんだ！…」

雄一はそう思いながらも走り始めた。

靴を変えたら、全力で階段を駆け上がり教室の前についた。

「ふう、やつとまい

翔く！――！」

いきなり田の前に現れたかと思つと逃げる前にアイアンクローラーを決められた。

「明久誰なんだあの子は？雄一をアイアンクローラーで持ち上げるなんて只者じゃないぞ」

「あの子は霧島さん、霧島翔子さんだよ。

雄一の幼馴染で中学での雄一と同じ学年トップの成績を持っているんだ。」

「どうで助けないでいいのか？雄一のてが垂れ始めたぞ？」

一夏は雄一の方を向きながら言つてきた。

「大丈夫だよ、流石にそんなことは

「

明久は固まつてしまつた、雄一の状況は手が力無くたれていて力が入つていながらすぐに判る状態だ。

すぐに戻つた明久達は急いで雄一を助けることにした。

すると

「あたしを無視するなあああ――！」

いきなり鈴が大声を出した、だが

「――早くしないと雄一が死んじゃう――！」

それどころではなかつた明久達は、鈴をひけて雄一の救出に向かつた。

「霧島さん、早く手を放して！雄一が死んじゃう！」

そう言つと翔子は手を放して特別救助班の手当^{バカたち}てを受けていた。

「心臓の反応が弱まつておるんじやー。」

「ムツッソリーー、AEDの準備を急いで！雄一だから310チャージー！」

「300】了解ー！」

「明久、タンカを持つてきたぞー！」

「一夏は保健室に行つて先生に報告とベッドを開けてもらつてきて！」

「任せておけー！」

タツタツタツタツダン！
ドサー！

「300チャージ完】ー。」

「3・2・1」

ビリビリー！スパン！スパン！

「「グハツ！」」

いきなり頭を叩かれて頭を抑えている明久と康太は後ろを見ると、そこには織斑先生と保健室へと向かつたはずの一夏が引きずられる状態でいた。

「何をやっているか馬鹿者が！」

「一夏大丈夫か！」

この時クラスの皆は固まっていた。

織斑先生を無視する明久に驚いていたのだ。

「…すまない明久、先に…逝…く…」

「一夏あ～！」

「明久よ、雄一のほうが安定してきたんじゃ」「

「なら急いで保健室に連れて行くよ！秀吉手伝つてー！」

「承知ー！」

そう言うとタンカに雄一を乗せると明久と秀吉は走つて保健室へと向かつた。

そして残るのは明久に無視されて怒っていた織斑先生とクラスの皆だった。

「…フツフツ、吉井なかなかいい度胸じゃないか、この私を無視

するとはな」

最高の笑顔で笑う織斑先生を見た生徒は皆、涙目になっていた。

第八話 私を無視するとはな…… b y 千冬（後書き）

感想お待ちしています。

第九話 覚悟はいいな、吉井？

翌日 雄一サイド

朝のＳＨＲの前に織斑先生が来て、明久に補修をさせると「いつ」と
を伝えていたら。

「すいませんでした！織斑先生、とにかく鉄人の補修5時間×1週
間は勘弁して下さー！」

「静かにしろ、吉井！」

バシン！

「ぐべらあー！」

「1週間が嫌なら1ヶ月にしてやるつ、嬉しいだろつ吉井」

「鉄人！？ いつの間に来たんですか？」

「吉井、貴様は俺を馬鹿にしてるのか敬意を払つてているのか、わからなくなるな」

「すいませんでした！お願いしますから補習1ヶ月は勘弁して下さい！」

「そうです！ 明久にそなことしたら死んでしまいます！」

「失礼な！ 1ヶ月の補習なんて僕にとっては楽勝だよ

一夏達は『やりやがった』つて顔で明久を見ていた。
俺も勿論温かい目で見ているけど。

「ならなんの問題もないな吉井」

「へ？」

「ならば明日から1ヶ月、放課後5時間の補習を始める、逃げたら
どうなるか、いいな吉井？」

「しまつたああ！」

「五月蠅いぞ吉井！」

「ぐはっ…」

明久は朝から織斑先生からの宣言に抗議していたが、鉄人が来て、
助け船を出した筈の言葉に反論して結局補習を受ける事になった。

「流石だな明久、自分から補習を受けに行くとわ、俺には真似出来
ないぜ」

「……生きて帰つてこい、明久」

「明久よ勇者じゃな」

「明久、お前の事は忘れない！」

「五月蠅いぞお前ら！」

スパン!

卷之三

打撃音は一回なのに五人にきちんと出席簿を落とした。本当に人間なのか？人間じゃなくて悪魔だつたりして。

「貴様ら、今失礼な事を考えてなかつたか？」

「ええ、漏洩も」わしあせん」

1

バシン！バシン！バシン！バシン！バシン！

すしませんでした！」

わがわは良し

なぜこの美人悪魔は人の心を読めるのか

ノミシ
!

解せぬ。

こうして朝のSHRは終わつた。

— — — — —

昼休み

「やつと昼休みだ~」

地獄の午前授業が終わって明久達は食堂に向かっていた。

「待つていたわよー明久ー！」

「雄一ー待つてた」

「しょ、翔子」

「鈴と霧島さんだったか？今から食堂に行くけどよかつたら一緒にどうだ？」

一夏が提案した瞬間に雄一が回れ右して即座にダッシュした。

「おい雄一ーどこ行くんだよー？」

「悪いー一夏ー急用ができたー！」

「雄一ー逃がさないー！」

そう言つて霧島さんも走つて行つてしまつた。

その後に見えなくなつたところで雄一の叫び声が聞こえた。

「ムツツツーー、今日は何を食つんだ？」

「俺は、「わたくし、今日はお弁当を作つて来ましたの、よひしければどうですか？土屋さん……」馳走になる」

「そりゃ、明久はどうする？またパンの耳か？」

「失礼なー。きちんとしたのを食べるよ」

明久の発言で鈴以外が驚いていた。

「本当なのか！？明久」

「本当だよ、やっと仕送りが来たから食べれるよ

「そりゃ、俺はラーメンにするかな」

「なら僕はパエリアにしようかな」

食券を買ったから皆で注文の品を受け取り。

全員で座れる、テーブル席が空いていたのでそこに座った。
そして…

惨劇が始まった。

「では土屋さん、どうぞ」

そつ言つて出してきたのはサンド・ウイッチで凄い見た目が美味しそうにできている。

「…頂きます」

そう言つて康太はそのサンド・ウイッチを口にして、倒れた。

これには、食事をしていた。明久達も驚いてすぐにAEDを取り出して、歩み寄った。

「どうした、ムツツリーーーー！」

「…なんでもない」

そう言つた康太だが足が生まれたての小鹿以上に震えている。これは大事だと思った三人はセシリアの料理を見た。

「なあセシリア俺も一つもらつていいか？」

「いいですわよ」

そう言つて貰つたサンドウイッチを食べた一夏は、倒れた。
そしてこれを見た明久と秀吉の中で納得がいった、この料理は、カルウエポン化ケミ学兵器だと。

「一夏、（胃のほう）大丈夫かい？」

「大丈夫だ（かなりの威力だぞこいつはーーー）」

「ムツツリーーーー、せつかく貰つたんだから残さず食べなよーーー。」

明久はムツツリーーーに全ての処理を任せた。

「任せておけ…あの川の向こうに行けばいいのだろう？」

「だめだ！ムツツリーーーーその川を涉つたら帰つてこれないよーーー。それは三途の川だよーーー。」

不味い！これは本当に不味い状態だ！ムツツリーの目のハイライ
トが消えている。

「仕方ない、一夏サンドウイッチを」

「了解、だけどどうするんだ？」

「いいから見てて」

明久はサンドウイッチを一つ取ると康太の口に突っ込んだ。

「明久！それはやばいだろ！？」

「大丈夫だと思つよ…たぶん」

「やばい！ムツツリーの顔色が酷い色になつてゐる…」

「秀吉、300 チャージ！」

「300チャージ完了じゃーこつでもにけるんじゃ」

「蘇れムツツリーー！」

ビコビコビコ

「…！」はいつたい

「よかつた、助かつたんもが！」

明久は口をふさがれた、サンドウイッチによつて。

バタン

「明久！しつかりしるー。」

明久の口の中にサンドウイッチが三個分ほど詰めてあつた。
あの一瞬のうちに三つの凶器を明久の口に詰めたことに驚いている
と一夏は一步下がつて何かを避けた。

その避けた物の正体は先程、明久の口につめられた凶器と同じもの
である。

「ムツツリーー、やめよつとは思わないか？明久の中に詰めるとい
う」とで

「いいだろう」

俺は明久の口を開けさせて凶器をムツツリーーが入れた。
そしてAEDで蘇らせた。

「よくもやつたな！ムツツリーー！」

「お前がやつたんじろうが」

二人はクロスカウンターのようにして互いの口の中にその凶器を入
れた。

一夏は明久が投げた凶器が口に入つて沈んでいた。

そのとき秀吉は近くの壁に寄りかかるように体育座りをして頭を抱
えていた。

そして休み時間が終わった、女子は食事を終えて教室に帰っていたので置いてけぼり状態でチャイムがなつても戻ってこない明久達を探しに来た織斑先生がこの光景をみたときのこと。

「なんだ、このカオスな状況は？」

と言つたそうだが。

俺達四人は出席簿で叩かれて意識が戻り。

罰として、放課後に教室掃除をすることになった。

後日、明久は鈴を怒らせたと言つていて落ち込んでいた。そして、対抗戦の一回戦の相手が一組だった。

第九話 覚悟はいいな、吉井？（後書き）

感想お待ちしています。

第十話 覚悟しなむへんや鈴（前書き）

投稿がかなり遅れました。

すいませんでした！

第十話 覚悟しなさい～～～

「お、おはよ～」

「明久、今日は試合なんだから早くしろよ」

朝から明久は補修によつて疲れ果てていた。

「雄一、何か食べ物ない？」

「お前も何か買えはいいじゃないか」

「やうだつた・・・買つてへるよ」

「そんな暇は無いーーれつれと行くぜ」

「待つてよ雄一、せめて力 リーメイトだけでも食べさせへ

「いいから行くぞー！」

「よくないー！」

明久の絶叫は食堂に響いた。

アラビア

はピットで試合の準備をしていた。

試合の10分前になつて、ようやく見慣れた馬鹿が一人來た。
約一名ミイラみたいに干からびているけど…

「遅かつたな二人とも」

「俺は翔子に襲われて、逃げてから飯を食つていたら、明久が来た
んで連行した」

そう言つてミイラを前に突き出して來た。

「お、お腹すい…た」

雄一が明久を放すと一夏が口を開いた。

「そう言えば今日の対戦相手は鈴と副代表一人だけど誰なんだ?」

「一人は翔子だつたぞ」

「もう一人は誰なんだ?」

「わしの姉上なんじや」

秀吉はそう言つて鞄の中をあさつて明久の前に行つた。

「明久よこれでよければ食べるかの?」

秀吉は持つてきていたカロリーメートを差し出していた。

「ありがとう秀吉、今の君は女神に見えるよ」

「やつぱりあげないんじゃー。」

「馬鹿だな明久」

「・・・大馬鹿」

「至高の馬鹿だな」

「至高って何だよー?」

「そろそろ始まるし行こうぜ」

「無視かよー」

「さつあと行くぞ、馬鹿」

「待つてよ、おなががすいてそれど頃じやないよー。」

「気にするな」

「我慢しや」

「二人して酷いじやないか!」

「ひめこーな、一夏、そつちの腕掴め、連行するぞ」

「了解」

「待つてー!頼むから何かカロリーを頂戴、頼む揉むから!誰か助け

てえ！」

山田先生は苦笑いしていて、他の五人は目を逸らしていた。

「二の裏切り者～～」

一 夏と雄二の二人に両腕をつかまれた状態で明久はアリーナに向かつた。

アリーナ内

一 夏達の登場により、会場が緊張に包まれていった。

一 夏達三人を除いて。

「こら、 明久！ 暴れんなって」

「離して一 夏！ 僕が死んでもいいのかい？」

「その程度で死ぬならお前は此処に居ないだろうが」

一 夏、 明久、 雄二の三人は馬鹿をしていると、いきなり殺氣が飛んできてそちらに視線をやると

鈴が怒っているようで睨んできている。

「ずいぶん遅かったじゃない、 明久！」

「二の感じ、 鈴か、 もう一 夏何かしたの？ 早く謝つてよ～」

一夏と雄二はアイコンタクトをして頷くと、
雄二は手を離して一夏が明久を逃がさないように手を持つている状態になった。

「それは悪かつたなお詫びとこつては何だが、一夏」

「任せみ」

やつまつて一夏は鈴の隣に坐ってきた。

「機嫌直せよ鈴、こいつやるかられ」

いちかはあきらめをせしだした

「ありがとう、あたしは手を出さないから後は任せたわよ一人とも、
じゃあねー」

鈴は明久を受け取るとアリーナの端に飛んでいった。
残された翔子と優子はやれやれという感じで見ていた。

「あなたが織斑君ね、はじめましてこつも弟があ世話をなつていま
す。私は、木下 優子です。

よろしくお願ひします

「一夏君と呼んでもいいかしら?」

「ああ、俺も優子と呼んでもいいか?」

「ビハゾ」

優子が丁寧に自己紹介をしたので一夏も自己紹介をしていた。

「……雄一、私が勝つたらなんでも一つ言ひこと聞いて

「わかった、俺が勝つたらお前が言ひこと聞けよ」

「……わかった」

「一夏君」

「何だ？」

「私達も負けたほうが言ひ事聞くことで勝負しようか？」

「それ面白そうだな、いいぜ」

「一夏ー翔子たちを

「おうー」

「一一人を倒すぞーー。」

二人は少し相手と距離をとつて、それぞれの武器を構えて言った。
それがあわせて翔子達も武器を構えた。

「……優子、私たちも」

「ええそうね」

「「絶対に負けない！！」」

そして開始のブザーが鳴るのを待つていると。

「吉井！凰！早く戻つて構えろ！いつまでも始められないではないか！」

鉄人の怒鳴り声で明久達はそれぞれの位置に行つて、武器を構えた。

それと同時に開始のブザーが鳴つた。

第十話 覚悟しなむこへやく（後書き）

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7940s/>

IS <インフィニット・ストラatos> 馬鹿の集いしIS学園
2011年12月31日22時50分発行